

やまがら

定年退職まであと10年。定年モードに入るにはまだ早いだろう、と言われることも多い。定年後に生き方を大きく変えることを考えているので（一言でいうと、定年帰農・Uターン）、第2の人生に移る前に、今のうちから、第1の人生（林政研究者としての人生）をしっかりと振り返ることが必要だと思うようになった。

1つは、自分のこれまでの林政研究を総括すること。この出発点になるような学会発表を先日果たしてきた。出発点だけれども、すでに相当疲れた。

次に、研究生生活の上で面白かった本を振り返ってみた。もちろん、大きな影響を受けた本はたくさんあるし、本数を限定したところで体系的に抽出できるわけでもない。さしあたり、思いつくままに上位3位までを挙げてみる。

1冊目は、大内力の『国家独占資本主義』。院生時代に輪読ゼミで読んでし、昨年も大学の授業で再び読んだ。内容よりも、読みやすい文章に触れてほしいと思って学生たちに紹介したが、自分的には、時代の分け目、移り変わりを強く意識するきっかけになった本だ。国家独占資本主義の次のステージである新自由主義の学習にも大きな影響を与え、鶴田満彦や渡辺治を好んで読むようになった。また、マル経（マルクス経済学）は時代区分がやたら好きだが、自分もいつかは「階梯」なる用語を使いこなせるよう歴史分析が上手になりたいと思ったものだ。その語を論文中で使ったことは未だない。

2冊目は、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』。マル経界隈では「発達」と略称される名著だが、ソ連崩壊で政治家レーニンへの風あたりは強くなり、最近ではロシアのウクライナ侵攻もあって、堂々とこの本が好きだとはあまり言えない。ただ、ここで取り上げているのは経済学者としてのレーニンである。まず、この人は統計表の使い方がうまい。自分はその後センサス分析で修論を書いたのだが、統計からどんな集計表を作り、何を読み取るかと

いう膨大な作業を地道にこなすうえで励みになった。また、農民層分解論の核心部分に土地制度問題を取り上げたレーニンの功績は大きいと思う。これを入りに、国家の土地制度に限らず、民衆の土地所有規範、家産意識にも強く関心を持つようになった。レーニンは、博士論文ではたった数行登場させただけだったが、博士論文執筆中にもかかわらず、ついにはレーニン全集にも手を出してしまった（もちろん全部は読み切れていないが）。

3冊目は、杉原たまえの『家族制農業の推転過程』。ここで紹介されている沖縄の「預け預かりの慣行」が面白いと思った。昭和期に南米に移住した元農民の土地を地元に残った農民が預かり、管理をし、もし戻ってきたら返すとい

う土地慣行の話だ。宮崎県耳川流域上流での農林家戸別聞き取り調査でもこれと似たような話があった。下流の地方都市に土地を持ったまま

転出した元農民が、時々屋敷の手入れに戻ってくるのだが、隣近所の農民が転出した元農民の屋敷周りの畑を預かり、無償で耕作をつづけ、耕作まではしなくても雑草刈りなどの管理をして、元農民がもし戻ってきたらいつでも返すという、名称もわからない土地慣行だ。家産を大事にする意識、管理せず荒れるに任せるのは恥だと感ずる土地所有規範について強く意識するようになり、林家経営論にも社会学は大事だよなと思ったきっかけになった。最近ニュースで、墓じまい、屋敷じまいが取り上げられ、一昔前には集落じまいの研究もあった。自分の実家周りでも墓じまいをして集落を出て行った元農家（2戸）の土地や廃屋を父がまとめて引き受け、家屋解体までしてあげて、畑・山林管理を引き継いでいる。解体費は相当な負担だが、その代わり土地はただでもらうという仕組みだ。この場合は、その元農民はもう戻ってくることはない。83歳の父にはそれが好都合なのか、屋敷跡地に好きな広葉樹を植えるのを楽しみにしているようだ。（桜酒）

定年モード